

FD 通信 No. 1

飯田女子短期大学FD委員会 <http://www.iidawjc.ac.jp/>

発刊にあたって

「今あらためて、本学の教育の目ざすもの。」

学長 高松信英

「美しく生きる」とは、この短大だけではなく浄土真宗の教えに基づく高松学園の教育全てに通じる。その基本は「駄目な人は一人もない」ということ。この理念がきちんとしていないと、本学園の教育がおかしくなってしまう。小学校に入学した頃はみんな平等であるが、いよいよ授業がはじまり、小学校、中学校、高等学校と進む中で、できる子とできない子が出てくる。学校ではなぜできないのかということとはほとんど問題にされず、点数の高いできる子になることだけが求められ、できない子は、私は駄目だと途中で挫折してしまう。みんなの教育でなくてはならないはずなのに、今、日本の教育はできる子かできない子かで判断される方向に動いているように思われる。そしてそれは実社会にまで入り込み、いいところへ就職できる人はすごい人、そこから外れた人は駄目な人となって、「できる—できない」が「人間の幸せ—不幸せ」と連動してしまっている。

どんな人も同じ。それがわかってくると人と競争して勝つことが人生の目標ではないと分かってくる。本学での教育を通じ、人間に生まれてきたということは人と競争して勝つことが目的ではないと、はっきり教えなければならない。

建学の精神ではあえて「美しく生きる」という言葉を使っているが、ここで目指すものは、学生が卒業までの短大生活を通して、人間に生まれてきたことは本当に素晴らしいことだったんだと自覚して卒業していくことである。いろんな知識をたくさん身につけただけの、偉く見える人間になることではない。今、そこをはっきりさせないとこの短大はよくならない。

教員は、学生が短大生活を通し、もともと持っていた輝きを一層美しく輝かせて社会に出ていける力を育む、そんな教育をしてほしい。そして学生は、駄目な自分にとどまらず、人生は点数で決まらないことを実証できる生活をこの先自らの力でつくっていく、そんな力を身につけてほしい。

目次 発刊にあたって

①「学内FDトピックス」 家政学科 生活福祉専攻長 小笠原京子

②「授業改善アンケートを行ってみて思ったこと」

家政学科 川上恒夫、幼児教育学科 及川直樹、看護学科 所澤好美

③「FDアンケートの位置付け」 FD委員 岩月すみ江

①学内FDトピックス

「生活福祉専攻の取り組み」

家政学科生活福祉専攻 小笠原京子

平成 21 年度より導入された介護福祉士養成の新カリキュラムは、「介護」を中核とし、「人間と社会」、「こころとからだのしくみ」の 3 領域から成り立っている。このカリキュラムは、従来のいわば縦割りの科目構成から、各教育内容の相互連携を重視した包括的・体系的な構成になっている。このことは、少し視点を変えて見れば、利用者の生活課題を包括的に捉えて介護を実践するために、各専門領域の統合（融合）が必要であるという視点に立って、科目別体系から領域別体系へと転換がなされたといえる。

しかし、実際に新カリキュラムがスタートして、各科目間の連携、領域間の統合ができたかというところ、そうとは言えず多くの課題が見えてきた。まず、領域を越えて関連事項が扱われるので学生は戸惑うということ、また、教員も他の科目や領域で教授していることを把握していないため、教育内容が重複していたり、重点を置くべき内容が十分に扱われていなかったりすることがあった。

そこで 3 年目の今年、各科目間連携を目指して、養成課程専任教員（生活福祉・福祉専攻の教員）において共通のワークシートを作成し、授業毎に学生に配布することにした（上の図）。ワークシートには、日付、科目、テキストのページ、要点、キーワードを同じ形で入れることにした。また原則として授業前に各教員に配布し、参観希望の授業にはいつでも参加可能であることを互いに合意した。自分が教授する内容と関連する教育内容についての授業を受ければ、より効果的な授業を考えることができるのではないかと考えたからである。

3 ヶ月が経過して、ワークシートを統一することで、教員はその授業で何を教えるのかを明確にすることができるようになった。また、教育内容の相互理解は深まり、自分の授業と関連のある内容はチェックし、関連項目であることを伝えながら教えることができるようになった。しかし、現時点では科目間、領域間の連携までは検討できておらず、自分の授業が毎日複数コマある中で、他の教員の授業に出るところまでの余裕はない。また、学生にとってのワークシートの効果については評価できていないので、前期終了時に各学年毎アンケートをとる予定である。さらに、現在は専任教員以外の教員の参加を得ていないため、養成課程全体の統合にはまだまだ道は遠い。しかし、本学らしい教育を考えるチャンスでもあると考え、諦めないで検討していきたい。

23. 4. 12 生活支援技術 G	
第 2 章 一 第 1 節 住環境整備の意義と目的	
一 居住福祉という発想一	
要点	キーワード
1. 「生活」の場である住まいにおいて行われる活動	「住まい」は生存の基盤 居住福祉（早川和男）
2. 介護保険制度では在宅重視の政策が続いている →その受け皿となる「住み慣れた家」の安全性や快適性、福祉用具の利用可能性が、改めて問われている。 福祉との連携を重視した住宅政策の展開が不可欠である。 1997 年 8 月末兵庫県の仮設住宅居住者の孤独死 169 人 →老人ホームへの最大の入所理由は「家庭事情」だが、家の狭さと関係している。第二位は「（ ）事情」で半分は「狭さ」である。 * スウェーデンは、1977 年以降の住宅の基準は、加齢もしくは障害をもって住み続けられるようになっているが、改造できる設計でないといふ許可がない。 * 地域に多様な人がいることは、教育環境であり福祉環境である。	社会的良心 絆をつくる町づくり
3. 直接的自立支援としての住宅あるいは居住の意義 住環境整備の本来の目的は「自分でできなかったことをできるようにすることである。パーソナル・エイドの導入前に、（ ）整備が必要である。 間接的自立支援としての住宅の意義・住環境の予防性 「すべての人の自立」にむけた環境整備が問題発生を予防する。 →のちの改善が容易に実施できるような住宅を新築段階で予防的に建築し、必要に応じて簡便な改善を世帯単位や個人について実施する。	パーソナル・エイド テクニカル・エイド
4. 健康と住居 狭い家→物が散乱し、非衛生的になりやすい。ストレス、不眠、抑うつ 階段・段差・不備→事故多発 日照・通風の不良、高湿度→関節リウマチ、神経痛によくない。意欲の低下 居住環境の侵害・住宅費負担と疾病→	シックハウス
次回 4 / 14 (木) 安心で快適な生活の場づくり	

②授業改善アンケートを行ってみて思ったこと

「授業評価は難しいと感じています」

家政学科 川上恒夫

学生の授業評価には様々な議論があり、その受けとめ方も難しいと感じています。学生の評価や声を積極的に取り入れていく良い機会と思っている先生もいれば、学生との良い関係の構築が大事と考えている先生もいる。個々の先生には良い機会かもしれませんが、受けとめ方は別にしても相対的な評価にはつながらないのが現状です。FD 活動は見方によっては、教育のシステム化です。かつての大学の自由な教育や授業は、個々の教員の個性の場からは今はかなりかけ離れた所に位置しています。本学でも FD 活動に抵抗感を持っている教員はおそらくそう考えていると思います。

学生個人が批判や評価をしても、その結果を現在のような担当教員にゆだねるようなやり方ではあまり役に立たないというのが私の考えです。多くの短大や大学は、全入です。そうであれば、出口で必ず学士としての力をつけさすには授業を中心とした組織的でシステム化した教育活動しかないのではないのでしょうか。私は短大とし

ての教育の質を高めるため、授業評価も含めた議論を全学ですべきで、教員相互の授業参観もその有力な方法だと思っています。また、1つ1つの授業科目の大切さや置かれている意味を教員全員が認識し、それを学生に伝えていく義務も教員にはあるはずで。私たちは絶対ではないし、全てではありません。そして、学生にとって1番よい先生かも疑問です。しかし、学生の人生を左右する場にいることは確かです。ある先生が、専攻会の時にことばは多少違っていますが「全ての学生が僕らの財産だ。」とおっしゃっていました。今、学生に対して謙虚な気持ちで授業に臨むように心がけていかなければと後ればせながら感じています。

私は、授業評価は決してよくありません。自分では、正確なことをきちんと伝えながら学生との間違えな対話で進められる授業形式がとれればと試みていますが、結果はいまひとつです。アドバイスください。

「授業改善アンケートへの取り組みとFDの今後」

幼児教育学科 及川直樹

私がこれまでに実施した5回の授業改善アンケートの中で感じたことは、思っていたよりも学生は教員や授業をよく見ているということです。ただし、学生の授業に対する理解度のみを優先して授業内容や方法を選択するのは、少々短絡的であるように思います。

例えば、私は学生にとって理解するのが難しい事項はできるだけ例を挙げながら平易な表現で説明することを心がけていますが、時には学生にその手続きを委ねることがあります。また、グループワークにおいてやや難しい課題を提示することもあります。私としては、学生の読解力や思考力を伸ばしたい、あるいは学生同士が協力する中で問題解決をしてほしいといった意図があるのですが、それが学生にうまく伝わっていないことがアンケート結果から見いだされることがありました。学生からすれば、授業に対する理解度がその授業のおもしろさにつながる側面もあるのかもしれませんが、教員からすれば、学生の授業に対する理解度は当然求めつつも、授業のおもしろさに対する価値の置き方については学生とは異なることがあると思います。この点については、授業目標を含め教員の考えが伝わるよう、学生にその都度説明していくことが大切だと思いました。こうした経験を通して、アンケートは教員と学生が協働してよりよい授業のあり方を模索していく取り組みであると感じました。個人的には有意義であった授業改善アンケートですが、全学的にみた場合、その取り組みが有効に機能していないように思います。つまり、授業改善アンケートは主に各教員の責任の下で実施・総括・授業改善がされているため、取り組みが個々の教員にとどまってしまうということです。アンケート結果をもとに、教員同士がよりよい授業内容や方法を検討するには、もう少し有効的な活用の仕方があるのではないのでしょうか。

また、FDが授業内容・方法を改善し、結果的に学生の学びの質を高めるのであれば、学生の学びの質を高める直接的な取り組みが必要ではないのでしょうか。近年は推薦入試での入学生の割合の高さや、学生の学力・学習意欲の低下が指摘されています。そのことを踏まえると、大学で学ぶ目的を明確にした上で、高校までの受け身の勉強から、大学での自主的な学びへ学習スタイルを転換させる必要があると思います。こうした教員・学生双方に対するアプローチにより、最終的に専門職としての資質能力が担保された学生を社会へ送り出すことができるのではないのでしょうか。

「授業改善アンケートを行ってみて思ったこと」

看護学科 所澤好美

FD 授業改善アンケートは、講義や実習指導の振り返りに使用しています。アンケートの結果の良し悪しは、私の心を沸き立たせたり落ち込ませたりと揺さぶってくれます。

しかし、授業改善アンケートの結果は、その時の学生の状況によっても変化すると考えています。演習後にアンケートを行ったことがあります。演習に向けて教員は、臨床場面に近付けた設定を作り学生が患者役に真摯に関わるように計画し、学生には自分の事前学習のレポートに基づいて行うこと、練習をして参加することを課題としました。その結果、学生は真剣に考えて取り組み、満足度の高い結果が得られました。また、講義のアンケートでは「一方的な講義になる時がある」と記入があったため、発問を多く取り入れた授業を展開したところ「質問をされたので、考えることがとても多かった」などの意見がありました。学生が自ら学習をして臨んだり、学生が知識を活かして答えを導き出していく授業は、充実感があり達成感が得られると考えています。学生の考える力が活性化された授業のアンケートの満足度は高くなり、そうでなければ満足度の低い結果に繋がると思い

ます。それらのことから、アンケートの結果は教員側だけの要因で変化するものではないと考えられます。授業

は学生と教員の共同体といわれますが、教員も学生もどちらも努力をして授業を作り上げる必要があると思います。教員は授業準備をし、学生も復習や予習を行なって授業に参加する、その努力の結果が教える側、学ぶ側の双方に充実感をもたらすのではないのでしょうか。

教える立場になって、学生が「分かった」と目を輝かせ表情が変わった場面に出合ったことが3回ほどあります。本当に目がきらきらしてぱっと明るい表情になり、その時の感動は忘れられません。教員になって良かったと思えた瞬間です。この瞬間に出会うために努力をしていきたいと考えています。

③FD アンケートの位置付け

「ベンチマークとしての授業改善アンケートの活用」

FD 委員 岩月すみ江

自らの教授方法によって学生がどのような outcome を達成しているのかという視点でFD 活動を行っていくことは重要です。建学の精神に基づいて、飯田女子短期大学に入学した個々の学生が、卒業時にどのような姿になってほしいか、卒業時までどのような力を身につけて社会に旅立って行ってほしいのか。そして、自らの授業は、その力を学生に与えているのか、これは大きな命題です。それを達成する一つの考え方として、学生自身が学問を探究できるような授業構築が求められているのではないのでしょうか。

上記をベンチマークする方法は様々ですが、一つの方法として授業改善アンケートがあり、授業に対する学生の評価・意見を聞き、今後の授業改善及び教育方法の改善に資することを目的として行っています。FD 委員会ではアンケート結果を点数化せず、各教員にその扱いをお願いしています。それは点数化することでその点数が独り歩きし、点数の比較の中で教育の方向を誤ってはならないと考えたからです。しかし、5段階評価として中間点を設け、点数化もできるようにもなっています。授業改善がどの程度なされているかを確認するためには、経年変化の把握が必要だと考えているからです。FD 委員会では、学生の回答への手間や負担を考えて簡素化したアンケートへマイナーチェンジをしましたが、それでも経年的変化を捉えられるようにと思い、大きく質問項目を変更しませんでした。他の教員と平均点を比べてもあまり意味がないと思います。自らの授業評価の傾向を知り、経年的評価を捉えることによって授業改善アンケートが活用されてくるのではないかと思います。また、授業に対する教員と学生の認識の差が把握しやすく、しかも学生からの建設的な提案が行えるように自由記述欄も設定してあります。時々、自由記述欄の記述が少ないという話を聞きます。それはとても悲しいことです。自由記述欄に自分の意見を書くことこそが、学生と共に授業を作っているという意識を持たせることにつながると考えています。

FD 活動が活発になるためには、シラバスの充実、教員相互の学び合いや学生との対話など様々な方略が必要だと思いますし、授業改善アンケートが形骸化しないようにアンケートの意義や活用方法についての共通認識も必要だと考えています。また、新しい発想も大切にしたいと思いますので、こんな方法あんな方法という自由な意見をFD 委員までいただけたらと思います。

編集後記

FD 通信創刊号が発行できました。学長先生はじめ多くの先生方からご寄稿いただき、無事発行に至ったことをうれしく思います。ありがとうございました。学生が学びの真の喜びに出会える短大となるよう、これからも教職員一同FD に取り組んでいきたいと思っています。今後、このFD 通信が、教職員にも学生にもよりFD を身近に感じてもらうきっかけとなるよう、編集に当たっていききたいと思っています。年2回、前後期末の発行を予定しています。FD に関するご意見ご感想など、メール等でお寄せいただければ幸いです。今後ともよろしくお願いいたします。(FD 委員長 松崎行代)

飯田女子短期大学FD 通信 No.1 (発行日 2011年7月20日) 編集担当 FD 委員会

委員長 松崎行代

委員 伊藤洋子 岩月すみ江 川俣幸一 黒岩長造 坂上ちおり 友竹浩之 中山美香 長谷川孝子

事務局 教務部：稲吉政岳

※FD通信へのご意見ご感想をお待ちしております。 fd@iidawjc.ac.jp